
MOMENTS

midnight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOMENTS

【Nコード】

N7133P

【作者名】

midnight

【あらすじ】

この世には人間を襲う、あるいはペットなどとして飼われる怪獣、モンスターがいる。

そしてその怪獣らを倒すというミッション、あるいは捕獲するというミッションなどを攻略できれば、それなりの報酬が手に入る。

これは一人の青年と、青年の相棒である狼が繰り広げる、ハンターとしての壮大な物語である。
ストーリー

主要人物紹介（前書き）

どうも。

先に人物紹介をしておこうと思ったのですが、話を制作して行く上で新たに人物を足すことがあると思いますので、宜しくお願い致します。

なお、更新できる時に更新するので、首を長くして続きをお待ちください。（笑）

主要人物紹介

『登場人物紹介』

主人公… ラクラス

自由奔放がモットーの18歳の青年。
この世界にいる怪獣やらモンスターやらを狩ることを職種としているハンターでもある。
珍しい怪獣などを求めて世界中を渡り歩き、金の為なら大体どのようなミッションでも引き受ける。

相棒… バルド

ラクラスと共に旅をし、いわば狢犬の役割をして彼に危険や怪獣の位置などを知らせてくれる狼。
ついでに、人と話す事ができる。

相棒 … アップル

ラクラスの連れている馬。

言葉を話す事は出来ないが、俊足でいつでも二人を未知の世界に連れて行ってくれる頼もしい旅の友である。
ラクラスの下手くそなネーミングによって『アップル』となった。

ハイリア王国国王… ランゼルス

ハンターのラクラスとは古い付き合い。
たまにぼうつとすることもあり、国王と云う厳つい称号を得ているのに温厚で、天然っぽいところがあるちょっと頼り無い男。

ハイリア王国大貴族 ネクシス家令嬢… アイルーン

ラクラスが囚われていた彼女を救ってから、ラクラスの事を気にかけるように。

その美しさが為にラクラス自身も…？

プロローグ（前書き）

初めまして。

この話を制作していて気付いたのですが、あの有名なゲームに似ている、と。

しかしこの話は他のゲームや小説とは一切関係の無い、ましてや私自身の妄想上で出てきた話ですから、御安心ください。（何言ってんだろうか、自分…）

皆様の御意見をお待ちしておりますので、是非、是非御感想を下さい。

きつと返事を返します！

プロローグ

ハイリア王国、そこは巨大大陸であるナーバルク大陸の最南端に位置する国。

自然も多く、海の恵みや山の幸を頂ける気候にあるこの王国の王都イリアーナでは朝から軍議が続けられていた。

軍議、という名だけあって軍事関連の事か何かと思っている人は多いはずだ。

だが彼らが話し合っているのは隣国や武装集団の事などでは無い。

モンスター
怪獣だ。

この国には数えきれないほど多くの種類の生き物があり、その中には人間から怪獣と呼ばれる奴らがいる。

彼らはしばしば人に危害を加えるので、国としてもこれは取り締まらなければならない事態だった。

「ランゼルス国王陛下っ」

軍議の謁見の場でぼうつと椅子に座りながら硬直するハイリア王国の国王、ランゼルスを見て、前にいた丞相の男がまるで駄目出するかのよう言い放った。

口には出さないが、居眠りの様な物をしていたような：

「あ、ああ。 すまない」

数日前に今年で21歳になったランゼルスは、自身の華やかな誕生日パーティーの時の事を思い出しながら何となく椅子に腰かけていた。

特に意見を出したり聞いたりすることはなく、ただ会議の為に顔を出している、って言う感じに。

「先ほどから話している通り、モンスターの中でも比較的凶暴な猛禽類、ラ・ホークが大量発生し、国内での人的被害が去年の30倍になっている、ということについてですが、陛下はどうお考えでしょうか？」

正直、軍議があまりにもつまらなさ過ぎて爆睡とまではいかないもののうっとりとなりかけていたのは事実。

そんな彼の虚を突いていきなり質問を投げかけたのは、テーブル

を挟んで正面に座る中年の上將軍、アミダだった。

ランゼルスが軍議の内容を一切聞いていなかったというのを知りながらも、随分と白々しくて嫌らしい口調であった。

「…軍を出撃させてはどうかかな？」

「ですが、経費が大きすぎます」

さてはさっきの話を聞いていなかったな？　というような眼でこちらを見る幹部たち。

相手が国王なので「さっき言いましたが」などとは間違っても言わないが、やはりそういう目で見られる。

ラ・ホークと云うのはワシやタカの仲間である猛禽類に属しており、度々腹をすかせては人を連れ去ってゆくという事件が急速に増加している。

だからこそ今日の様な会議が開かれたのだろうが、特に目立つ進展が無いまま会議は凍結していた。

「お、そう言えば俺はハンターのラクラスとかいう自由奔放な男を知ってるが」

今度ばかりの意見は通りそうだった。

何故なら、臣下たちの反対や意見が一切無いからだ。

ついでに、ハンターと云うのはその名の通りこの国だけに限らず、様々な国のモンスターを捕まえ、または倒すというミッションを引き受けて成功させることで報酬を得ている者達である。

彼らも一人で狩りをするのではなく、数人、あるいは数十の同士らが集まってミッションを引き受けることもある。

ハンターの集団のことをコンパといい、それぞれが仲間と一致団結して目標を仕止めたりするのだが、個人の場合もある。

個人の場合は相当な腕を持っていない限り難しいミッションには向いていないが、いざ勝利を得ると報酬金を一人占めできるという利点がある。

まあそれはさておき。

「陛下、そのハンターのラクラスという男が何か関係あるのでしようか？」

嫌らしく、そして訝しげに訊き返すアミダの前に、ランゼルスは咳払いまでして言い切った。

「奴は私の知る限り最強のハンターだ」

ラ・ホーク来襲？（前書き）

ここでまさかのラ・ホーク登場！

ラ・ホーク来襲？

真昼時から賑わう酒場 兼 食堂。

そこには力仕事専門やハンターの男らが集まってそれぞれの持つ日々のネタを明かしたりする場所でもあるのだが、どのような店でも午後5時を過ぎれば閉店する。

民家も、店も、何もかもが午後5時には閉店する。

何故なら、夜になると怪鳥ラ・ホークが出没し、人をさらって行つては骨のカスになるまで肉を食べられるからだ。

だからこそ安心して行くことのできる昼間に皆酒場や店に集まる。

しかし最近は大量発生し、腹をすかせたラ・ホークらは草原の野ネズミ全てをたいらげ、次に向かったのは人里だった。

おかげで希にだが昼間にも現われることもあって、油断は禁物なのだ。

今日も食堂ではむさ苦しいオッサンや男らで固められていた。

「…また昨日もランベルさん家の息子さんがラ・ホークにやられた
そうだ」

丸い木製のテーブルにドンツとビールの入ったジョッキを置く若い
男が、自分の正面の席に座っていた巨漢の男に向かって声を潜めた。

すると巨漢は一瞬ビクツと止まった後、片手にしていたビールを
全て呑み干した。

「あの家には猛獣のリブラが番犬として飼われていたはずだろう？」

だが若い男は、巨漢の低い声を否定して首を横に振った。

「リブラごと…らしい」

「そりゃあ恐ろしい……」

いかにも強そうな巨漢が身震いするのに無理はなかった。

全長が2メートルを超し、最大で3メートルにもなるという怪獣
を猛禽類の群れが連れ去ったというのだからそりゃあ凄いい、という
域を越えて背筋が凍るくらいだ。

連れ去られたという男の子も無事ではないだろう。

「その息子さんは夜に外に出歩いていたのか？」

「いや、リブラと過ごしていれば何の問題も無いと思っただらしく、

昼間に森で仲間らと遊んでいたらしいが、その間にバシユツと…」

男は巨漢に向かって自身の首を掴む真似をした。

「どうやら周りも似たような話をしているらしく、両手を使ってジエスチャーしている者もいる。」

だがそんな真剣な雰囲気をおち壊す一人の青年が見事なほど綺麗なヘッドスライディングで飛び込んできたものだから、皆はビビッて身を後ろに引いた。

「着いたあゝ！！　メシいゝ」

ドタドタと足早に周りの視線を気にせず走り、近場の席に座るラクラス、そしてその後ろをてくてくと可愛らしく付いて行き、彼の座っている椅子の真横で御座りするバルド。

どちらも空腹のせいで一刻も早くメシにありつきたかった。

「え、えゝと御一人様？」

小さな盆を持って現われた女性店員。

彼女はテーブルでぐったりとするラクラスの顔を愛想笑いで覗きこ

むと、人差し指を立ててからもう一度「御一人様ですか？」と訊いた。

だがラクラスも忘れてはならない相棒を指差す。

「…あ、このワンちゃんもですか？」

「俺はワン公じゃねえ！」

急にバルドが店員に向かって吠えたものだから、彼女は思わず盆を落としてしまった。

「こら、あまり人前で吠えるなど言っているだろうがっ」

「だってよう…」

ポンポンと頭を手の平で押さえつけながら叱るラクラス。

だが周りの視線はずっとこちらに向けられていた。

「ええっと… 狼？の方ですか？」

「はい。 コイツの場合、ハンターのペット用生肉をお願いします。
あと、俺は定食Aで」

「かしこまりました」

ラクラスは注文メニューをパタンと閉めると、再び力無くぐだつた。
なった。

店員が店の奥に消えたところで、店内にいた数人の若者の群衆がラクラスに近寄る。

「…へえ、もしかしてアンタもハンターやってんの？」

男の中の一人はラクラスの重装備を見て感慨深く言った。

しかしラクラスは眠たそうな貌をしたまま「うん」と力無く頷く。

「俺達も首都からわざわざこの地にやって来たんだけどよう、何？
アンタもこの村の噂を聞きつけてやってきたわけ？」

囲まれてから、こいつらはロクでもないハンター集団なのだ、と悟った。

言い方から喧嘩を売っているような感じだし、常に上から目線でこちらを見ている。

バルドもそれを知って微かに牙を向けたが、男達はそのような些細な威嚇に気付かない。

「駄目だなあ、ここは俺達が片付ける仕事があるのにさ、横取りされたらこちらとしても面目が立たないんだよね…」

「…どっかのコンパか？」

「おおっ、よくぞ訊いてくれましたぁ!!
俺達は国内一の最強（をを目指す…）コンパ、ワイゼンラブクだぁ!
」

彼らが振り付けで丁寧に説明してくれている中でラクラスの前に、
ホカホカのメシが運ばれてきた。

バルドの方にも生肉が沢山乗った皿が置かれるのだが、彼らのう
るさい声は止まることを知らない。

「……………知らぬ名だ」

……………はい？

ワイゼンラブクというコンパの男らはその場で硬直して止まった。

まさか、彼がその名を知らないとは知らなかったからだ。

「…お、お前の名は何だ？」

「人に名乗る様な名は無い」

粹になって威張るワイゼンラブクだったが、まるでラクラスに相手されずコケにされていることを笑う周囲の目線を確認すると、中でもリーダーっぽい風貌の男は頭に血を上らせて真っ赤になると、黙々とメシを食うラクラスの胸倉を引っ張った。

「てめえ、さっきからその態度は何だ？ あ？」

それでもラクラスは落ち着いている。

店内も静まり返り、緊張が周囲を席卷したその時だった。

ゴォーン、ゴォーンという硬い鐘の音が鳴り響き、皆の耳がそちらに向けられた。

「まずい、ラ・ホークが現われやがった!!」

そんな事を言いながらドタバタと近場の店内や民家に駆け込む村人達。

そう言われてみれば店の上空らへんで鳥の高い鳴き声がこちらまで響いて来ている。

鳴き声がこの真上から離れないところを見ると、どうやら上空を旋回しているようだ。

気付けば、ワイゼンラブクの奴らは皆ラクラスのことなど放って、自身の座っていた席から剣や槍、弓矢を持って外に出て行こうとした。

「お、お待ちください!! 今外に出たらラ・ホークの餌食になります!!」

「へ、俺達は今までミッションに失敗したことの無い最高のコンパなんだ! たかがラ・ホークくらいで負けるかよ!!」

柄の悪そうなワイゼンラブクの奴らはまるで店員の言う事を聞かない。

ま、俺の知ったことではないが…

ラ・ホーク来襲？（前書き）

ラ・ホーク来襲編は短かったのですが、読者の皆様が読みやすいように二つに割りました。

ラ・ホーク来襲？

ラクラスが物凄い早さでメシをたいらげ、最後の水を飲み干そうとしている時だった。

「た、助けてくれえ！！！」

先ほどまで勢い付いていたワイゼンラブクの男の内たった一人だけ、しかも顔に山ほど傷を負いながら再び店内に戻ってきた。

服もズタズタで、わずか数秒の間にあのバカ共がやられたようだ。

「助けてくれ！ 仲間がラ・ホークに…」

その時、ついにラクラスが席を立った。

外では馬鹿なマネをして痛い目を見ているワイゼンラブクの奴らがいる。

「御客様、どこに…」

「なあ店員さんよ、ラ・ホークって売ったらいくらする？」

店の中にいた者らは全員白い目をしてキョトンとした。

こんな空気の中で商売の話しかよ…

「え、あつと確か、この村に住んでおられる怪獣売りに売ったら一羽3000ジュアルくらいはするかと」

「…行くぞバルド」

「え、ちょっと!!!」

まさか本気であの怪鳥ラ・ホークを倒しに行く気なのか!?と云う目で店内の者ら全員がこちらを見る。

バルドも主人の命令とあらば、メシを一旦その場に置いてラクラスの後ろに付いてゆく。

「やめてください!! あの方々を助けに今出て行ったらあなたが死ぬことになりますよ!!」

しかし店員の言葉とは裏腹に、ラクラスは思わぬことを口にした。

「だゝれがあんなアホ茄子野郎共を助けに行くって言った?」

シラゝツとした空気が起こった。

え、じゃあ何しに自殺しに行くの?

そもそもラ・ホーク相手に今出て行くなど自殺行為。

皆は揃って窓越しにラクラスの姿を憐憫の眼差しで眺めた。

どうやら外では思ったより相当苦戦しているらしく、自身らが最強と名乗っておきながら一人に対して5羽の比率で囲まれている。

そんなところに（いつの間にか）剣を抜いたラクラスがツカヅカと出て行く。

意外と襲われないらしく、というかワイゼンラブクの者らを襲っているラ・ホークはラクラスにまるで気付かない。

しかしそう言っているのも束の間。

堂々と現われた新たな獲物に、ラ・ホークの群れが大声を上げて早速彼に殺到する。

もはや勝負はついたかのように見えた。

だが次の瞬間、窓越しの傍観者らは顎を落としてそのあり得ない光景を目の当たりにすることになる。

無言で立ち尽くすラクラスの元に殺到する、羽を広げたら3〜4メートルはあろうかという巨大な鳥、ラ・ホーク。

しかしラクラスは何の躊躇いもなく剣を上には挙げると、拳に思いっきり力を込めながら渾身の力で空を斬り裂いた。

…するとどうだろうか、ラクラスの前にあった大気の殆どが真っ赤な炎に覆われ、飛んでいたラ・ホークらは全てその業火の如く燃え上がる炎の餌食となった。

いわば火炎放射だ。

長剣から出された炎が奔流となり、飛んでいる彼らを覆ったのだ。

勿論、怪我だらけのワイゼンラブクの奴らを襲っていた上空の彼らも同じ運命を共にする。

誰もが啞然とし、傍観者の中には手元のガラスコップを落とす奴が出たくらいだ。

灼熱の業火が晴れた大気の中、地に身動き一つせずに頭部を真っ黒に焦がされて落ちていたのは、間違いなくラ・ホークの死体だった。

その数、およそ20。

逃げる奴も襲いかかって来る奴もないということは、どうやらラクラスの剣のわずか一振りで全滅したらしい。

そのあまりの恐ろしさに震えてへなへなと地に座り込む男共の集団。

ラクラスはパチンと剣を鞘にしまうと、先ほどと変わらぬ眠たそうな顔をしたまま再び店内に戻った。

待っていたのは、観客らの歓声だった。

「す、すごい!!」

「お前、やべえな!!」

そんな声がラクラスにかけられるが、リブラ討伐ミッションをした時に比べれば別に大したことでは無い。

そして先ほどとは立場が入れ違いになり、床に座り込むさっきのワイゼンラブクの男を前に、ラクラスは上からの目線で蔑視した。

彼も驚嘆と恐怖で震えている。

「おい、」

「は、はひ!」

もはや声にならない。

今にも小便をちびりそうな彼は涙ぐんだ眼で土下座しながら先ほどの失礼極まりない行為を謝していた。

「…俺の名はラクラス。

知らなかったら覚えておくんだな、どこぞの最強を名乗るワイゼンラブクさんよ」

あのラ・ホークでさえも簡単に封じてしまう彼に、もはや誰も威張って名乗ることなどできるはずも無かった。

ワイゼンラブクの男も「恐れ入りました!」と誠心誠意の心で頭を下げる。

後で店員に聞いた話。

「生きたまま捕獲して売ると、死体を売った時よりも3倍の値段が付くのに…」

その一言でラクラスとバルドは両手と両膝を床に付いてガックリと落ち込んでいた。 o r z

被害（前書き）

本編突入ゝ
まだまだこれから！

被害

わずか数十分で一氣に有名になったラクラス。

そんな彼は村で倒したラ・ホークを全て売って金にすると、次の日には中継先のスビッツ村を離れ、とある牧場に向かっていった。

牧場はスビッツ村を離れて山を登って行ったらあるらしいのだが、何故彼が牧場なんかに向かうのかと云うと、その牧場の近くにラ・ホークの拠点となる洞窟があり、どうかそいつらを全滅して欲しいという村人の願いがあったからだ。

勿論生死を賭けた戦いを頼んでおいて無償と云う訳はない。ちゃんと村長から依頼金というものまで貰っている。

数十分もすればその牧場に着いた。

山の頂上の方は随分広く開けていて、黄緑色の背の低い草が鬱蒼と生えている。

だが家畜の姿が見当たらず、随分と前から牧草が食べられていないようですっかりボウボウに生えてしまっている。

これだけ晴れているというのに人も見当たらなければ、牛や羊の姿も無い。

辛うじて見えるのは牧場のド真ん中にある少し大きめの一軒家。

鶏舎の様な物も見え、どうやら中で飼っているようだ。

これだけでも大きな土地を柵で囲ってあるというのに。

牧場は地形上緩やかな傾斜となっていて、そこを上がったラクラスとバルドは一軒の家の前に立った。

造りはかなり古く、家の周りにある柵の様な物だって所々が折れており、決め手は家の壁の方にある無数の鳥のフン。

ラ・ホークであろうが、その数は異常なほど。

少なくとも100羽はいるだろうという計算。

「ランベルさん!! いらっしゃいますか!?!」

ラクラスは村人から教えてもらった人名を口頭にして家の扉を叩いたが、応答は無かった。

「ランベルさ…」

「ラクラス」

何度も応答の無い家の戸をノックするラクラスのズボンを口で引っ張って止めたのは相棒のバルドだった。

「この家、ついさっきまでラ・ホークがいた形跡とニオイがある。もしかしたら連れ去られたのかもな」

バルドはその優れた嗅覚を持つ鼻を鳴らしながら天を見上げた。

空には白い綺麗な雲が点々としているだけだった。

「…手遅れか」

ノックしていた手を自身の腰の方に戻し、踵を返して道を引き返そうとした時だった。

「はいはい、私がランベルだが？」

家の真横にあった鶏舎からヒョイツと顔だけを出し、玄関の方を向いたのは一人の男性だった。

痩身で髭を生やしているが元気が無くて雰囲気落ち込んでいる、青の作業着を着た中年の男性だった。

彼は玄関先で立つ名も知らぬラクラスを見ると顔を顰めながらこちらに歩み寄ってきた。

「どちら様でしょう？」

「いえ、ただの通りすがりのハンターです」

ランベル氏はラクラスが自身でハンターと云うと顎を引いてのけぞった。

「ハンターっということは…」

「スビッツ村の人に言われてこの辺にあるというラ・ホークの洞窟を探しに来たのですが…」

やっぱり、という感じの表情でランベルは重いため息をついてラクラスの方に手を置いた。

「やめといった方がいい。毎晩毎晩ここに姿を現しては家畜を食べに行き、そしては我が子らにまで手を出した怪鳥だ。暗くなる前にここを去り、村で明日になるまで待ちなさい」

だがラクラスは一步たりとも引こうとはしなかった。

そして自身の持ち歩いていたナップサックから袋を取り出すと、ドサッと玄関の石段の上に置いた。

「こ、これは…」

「俺が仕留めた獲物ラ・ホークです。　これでも信用なりませんか？」

ラクラスは驚嘆して口を塞ぐランベルを真摯な眼で見つめた。

ラ・ホークというのは普段集団で暮らしており、いかなる場合も何羽かが集まって行動する。

つまり、彼が取り出した一羽のラ・ホークは、ラクラスがいっぺんに何羽もの数の怪鳥を倒した、ということを物語っていた。

「人間さんよお、俺達に任せてみてはくれないか？」

判断に迷うランベルに追い討ちをかけたのはバルドの一言だった。

「…と、取りあえず中に入れてくれ」

作戦は大成功だった。

ランベルはギィツと云う音の鳴る戸を開けると、ホコリっぽい家中を案内してくれた。

少し鶏とか牛とかの臭いがするが、そこは勘弁だ。

長い廊下を通り、先に案内されたのはリビングだった。

特に何の飾りも無く、唯一あるのは家族での写真だけだった。

4人だったらしく、そこには青空の下に浮かぶそれぞれの笑顔があった。

「茶も出せずに申し訳ない」

「いえ、お構いなく」

ランベルはラクラスを赤のでっかいソファ―に座らせると、その正面にあった四角い椅子に腰かけた。

バルドは今でも外で警戒中だ。

「…洞窟が……何かと言ったね。 名前は？」

「ラクラス。 金になる獲物を求めて世界中を旅しているいわば放浪者です」

自分で言ったことにおかしみを持ち、元氣そうに破顔するラクラスの前でランベルは沈んだ顔をしていた。

「そうか、ラクラス君はハンターをやっているのか…」

「ええ。 昨日村に現われたラ・ホークを全部倒したら村の村長さんから直々のお願いがありまして、どうしてもやって欲しいっていうもんだから」

だがランベルの表情は曇ったまま変わらなかった。

「洞窟はここから程近い場所にある。

奴らは夜行性だが、家畜を外に出して置いたら昼間でもさらわれてしまうからね。 家畜は全部建物の中で飼っているんだ」

「早速ですが、その洞窟の場所とか教えてくれませんか？」

そんな時だった。

「お父さん…」

か細い声と共に、足元をふらつかせながら顔を赤くして現われたのは一人の少女だった。

まだ7か8歳くらいで、どこからどう見ても風邪か何かをひいているようだった。

だが風にしては症状が重い様で、彼女は左肩から手首にかけて真っ白な包帯で包まれている。

所々に赤い血の斑点の様な物が包帯に染みついて見えており、それが広範囲だという事を知ると、とてもではないがミッシェンのことなどどうでもよくなった。

「リーン、寝ていないと駄目だろう？ さ、お戻り」

「待って下さい！」

席を立て少女を寝かしに行くランベルをラクラスは引き留めた。

「この傷一体どうしたのですか？」

ラクラスは今にも倒れそうな少女の腕を見ながら言った。

「…君には関係ないよ。 大丈夫だから」

ランベルは繕った笑みで誤魔化そうとしたが、これは風邪やそこらの病気ではない。

「御子さん、きっと破傷風になってますよ」

その一言はランベルの表情を180度変えた。

彼の眉間にしわが寄ってゆく。

「何故そんなことが君に分かるのだい？」

「僕も長いこと自然の中でハンターとして暮らしていますから、これくらいの病気にもかかったことはあります」

すると、今まで知らぬふりを続けていたランベルにも焦燥の感が出

てきた。

「……………つ、ラ・ホークにやられたんだ」

ランベルの眼には涙が浮かんでいた。

もうどうすることもできない悲劇の運命を目の前に控えた哀れな者のように。

「何故医者には見せないのですか？　このままでは…」

「ああそうさ！！　このまま放っておいたらこの子は死んでしまう！！」

あまりの突然に起った父の言動に、娘のリーンは『死』という誰ものが避けられない文字を聞いて大声で泣きだした。

だが彼が医者に見せられない理由があるのは様子を見て悟った。

「…妻は一年前からこの家を出て家族を養う為に都会に出て出稼ぎに出ている。　だが牧場を経営するに当たっても、維持費などがかり過ぎて娘の治療代金なんて高過ぎて庶民には手も届かない」

突き付けられたあまりにも悲しい現実だった。

道理で村の人々から『ランベルさん家を救ってあげて下さい』などと頼まれる訳だ。

だが悲しい現実はまだ続いた。

「息子はリーンの治療代を稼ぐ為に私に内緒で夜に外に出てラ・ホークを狩りに行ったのだけど、私の目の前で連れ去られてしまったのさ」

暗い空気にしかなかった。

だがその言葉を聞いてラクラスは決心した。

「麓に下りれば、獣を高く買ってくれる店がある」

「：私がラ・ホークを狩ることができればとっくに売っているよ」

「違う。ラ・ホークを30羽くらい狩って麓で売れば一年か二年は豪遊して過ごせるってことだ」

意味不明の発言にランベルは目を丸くすることしかできなかった。

片手で娘の体を抱きつつも、希望を無くした眼で彼を見ることし

かできなかったのである。

「安心しな。俺が何とかしてやる。

…で、洞窟には一体どれくらいの数のラ・ホークが？」

ランベルは目を丸くしながらも、頭をポリポリと掻くと人差し指で天井を指差した。

「…今夜泊まっていくといい。展望窓からその数が分かるから」

きつと数えきれないからそう云うのだろう。

ラクラスはそう信じ込むと自身の腰の剣に眼をやり、腕組みをしながら再びソファーに腰掛けた。

予想（前書き）

短くてすみません。

予想

問題はその夜だ。

ラクラスはランベルに勧められるがままに家に滞在し、夕刻から陽が完全に沈み切り深い闇が訪れるまで展望窓から外を見ていた。

展望窓は屋根からちよこんと突き出したところにあり、全面ガラス張りでがっちりと補強されているのだが、外に見えるのは全部ラ・ホーク。

屋根を覆い尽くす勢いでバツバツサと翼竜の如く大きな翼の音を立てながら空を舞うラ・ホークの群れ。

彼らは眼が赤色に光るので超不気味なのだが、ラクラスはそうでもなかった。

ガラス張りで外からは丸見えだとしても、彼らはラクラスが建物の中にいることを認識しているので、そう簡単には襲って来ない。

だとしてもこの数は半端じゃない。100、200、いや、もう一桁0が必要かもしれないくらい。

「どうだい？ かなりの数だろう？」

展望窓に上がる梯子の下でランベルが声をやや張り上げて言った。

こちらには広範囲にわたって敵を燃やし尽くせる焰の剣があるのだが、四方八方360度を何百羽もの大軍に囲まれていては、流石に経験を重ねたラクラスでも大苦戦するに違いない。

というか、無理。

何も無い虚空^{そら}には無数の星々が輝き、都会や首都圏では決して見ることのできない綺麗な夜空が広がっていた。

「ランベルさん、コイツらって昼間は一か所に固まっているんですか？」

ラクラスが梯子を降りながら言うと、彼は顎に手を当てたまま目線を天井に向けた。

「そうだな：闇の洞窟と呼ばれるところに1000を超越する数のラ・ホークがいると聞いている。

ただ、今までに軍や勇気あるコンパが入って行ったけど、誰一人として帰って来ていない」

本当に洞窟に行く気なら、あらかじめそんな無謀な行為を中止させる為に事実を包み隠さず暴露するランベルであったが、逆にラクラスはその情報に気分を高揚させたくらいであった。

一か所に集まってくれているのなら、俺の十八番だからだ！

進入

夜が明け、陽も大分高くなった。

昨日は鶏舎の方で夜を過ごしたバルドであったが、やはり外でラ・ホークを確認しているだけあって常に警戒をしていた。

ランベルに道を教えられ辿り着いたのは森の奥にある、ほの暗き石の洞窟。

遠くでは野鳥がしきりに鳴いており、少し不気味な感じがしない事も無いが、これも人助け兼金儲けだと思えばそんな畏怖は闇に葬ることができた。

辺りは流石に森だけあって、背の高さが全然違う木々が鬱蒼と生い茂っている。

また洞窟の入口に近付いて分かったが、苔がびっしりと覆っている小さな看板を良く見てみると、「サンリア鉱山」などと書かれていた。

どうやらこれは昔に採掘がされていた鉱山らしいが、この奥に1000を超えてラ・ホークがいるのだ、と思えばゾクツとした。

それは相棒のバルドも同じだが、彼の嗅覚に未だ何の異変も無いところを見ると、彼らは随分と奥で寝ているらしい。

滅多に昼間には出ることの無いと言われるラ・ホーク。

だが希に昼間に現われることがあるので、ここら一帯の地形を知り尽くす一般人でも簡単には近寄らないのがここである。

おかげで人の手が一切入っていないこの地は自然と云う怪物が完全に占拠してしまっている。

ラクラスは勇気を振り絞り、片手に弓、片手に焰を灯した焰の剣をカンテラ代わりにして坑道を突き進むことにした。

今では武者震いの様な物が起こっている。

先ほどまでランベルがあればどこまで執拗に「やめておけ」などと言っていたのを押し返して突き進む決心を固めたラクラスであったが、あの勢いは衰え、もはや虚勢ですらも無くなっていた。

流石廃坑というだけあって、じめじめとした空気の中を貨車が通る為のレールがずっと奥まで張り巡らされている。

一步步けばコツーン、という石が転がる音が奥に響く。

その横をゆっくりと歩いて進むバルドであるが、数分間廃坑を進んでも彼の嗅覚には何の異常も見られない。

そればかりか、欠伸までしてのほほんとしている。

「なあバルド、本当にこの中にアレだけでも（ラ・ホークが）いるのか？」

そんな彼に不安を抱いたラクラスが訊いた言葉である。

いつもは自分の気が向くままに行動し、決して危険を顧みることなく様々なミッションを完遂していく彼がこうやって心配気になることは非常に珍しかった。

珍しい…と思いながらも一応バルドは鼻を震わせて応えた。

「ああ。奥から流れて来る空気に奴らの臭いがぷんぷんしてやがる。

：それにラクラス、向こうさんもこちらの行動に御気付きになったようだ」

その時、暗き廃坑の奥、外の明りがもう全く届かないような暗闇の奥でバサバサと翼をはばたかせる音が聞こえた。

しかも一羽や二羽などという可愛らしい数字などではない。

すでに轟音と化しており、羽ばたく音が連発してゴォーツという音がこちらに徐々に近付いてくる。

先ほどまで欠伸をしていたバルドだが、そのあまりの音に身動きできなくなってしまうていた。

ヤバい、ヤバ過ぎる!!!!!!!!!!

暗闇から死へと誘うかのような悪魔の翼音、いかなる武器を持っているラクラスでもこれは踵を返した。

いや、一步でも二歩でも後退せざるを得なかった。

赤い目が無数に奥から姿を現した時、廃坑の外で中の様子を密かに見守っていたランベルは彼らの声を聞いていた。

「わあ——っ！」

っという叫び声を。

暴かれた正体

いくら廃坑といっても全てが全て暗い訳じゃない。

ある程度奥に行けば大きめの空間に出、少なくとも上を見上げれば10メートルくらい上にでっかい鍾乳洞が見られ、その周りを部屋の明かりが照らしている。

だが丁寧にもかなり大きめのベッドが置かれてあり、地はまるで家の中の様に絨毯が敷かれていた。

そのベッドに寝かされていたのは二人の男女。

男女と言っても年齢差があり、男の方はわずか10歳にも満たないであろう少年に対し、女の方は大人びた雰囲気が出てきた20歳くらい。

薄暗い廃坑の奥の空間で女性は眼を覚ました。

女性の方は、作業着を身に纏っている少年と違って高貴な純白のドレス姿で、その姿に似合うだけの美貌を持ち合わせている。

「やっと起きたか…」

しわがれた老人の声が聞こえた。

随分と歳を重ねているらしく、老齡なのが良く分かる。

ベッドに寝かされていた少年もその声にハッとして飛び起きた。

「ど、…ここはどこ？」

不安げな表情になって暗い辺りを見回す少年。

今にも泣き出しそうなその潤んだ眼の奥には堪え切れない恐怖があった。

「案ずるな、ここは誰にも見つからぬ廃坑の奥。助けなど来はせん」

目の前にいたのは、杖をつきながら不気味な笑みを浮かべるしわだらけの老人だった。

彼の傍には側近らしき人間が数人いて、じっとこちらを見ている。

「誰なの？」

今度は女性が訊いた。

「わしか？　わしはこの炭鉱を経営する男、デュリビットじゃよ。作業をしておる音が聞こえるだろう？

この奥ではわしの飼っている可愛い可愛いラ・ホークらが誘拐して来た者共を使って労働資源にしておる」

女性の問い掛けにデュリビットは得意気な顔をし、助兵衛な顔になりながらその豊かに張った胸を覗きこんだ。

「どこの炭鉱なの！？」

「そうか、お前達はわしの可愛いペットに連れ去られたから記憶が無いのか：

ここはハイリア国内有数の大炭鉱、スビッツ炭鉱だ」

「嘘つかないで！！　スビッツ炭鉱はその美しい景観から国宝に指定され、もう数年前から採掘は禁止されているはずよ！」

女性が反駁すると、デュリビットは下を向いて長いため息をついた。

「よく知っているな。　だがわしはこうやって人目のつかぬところで盗掘を続けておる。

貴様らにはその労働資源となってもらおう」

デュリビットに加え、その後ろで立っていた背の高い男らは不穏な笑みを浮かべて嘲笑した。

見知らぬ男共の冷酷なる表情を見て怯える少年を薄暗い闇の中で女性は一死に抱きかかえる。

少年の方も女性に力一杯抱きつく。

デュリビットの言った通り、闇の奥では今でも様々な音が鳴り響いており、誰かが働いていることが分かる。

いずれ自分達も強制労働を強いられるのか：

「何をする気！ 私達を解放しなさいっ」

「それは無理な要求だ。 お前達にはしっかりとこの廃坑となった炭鉱で働いてもらい、証拠を残す事無く死んでもらうのだからな！」

すると、近場に居合わせた数人の無表情の男性らは二人に近寄ると、無理に腕を引っ張りながらそれぞれを逆方向に引き離そうとした。

だが女性もギュッと少年を抱いたまま離さない。

「…往生際の悪い女だ。

そうだ、この美しい女はわしの物にしてやろう」

その声を聞き、筋肉の張った男らは見事に少年だけを引き離すと、女性をその場にほったらかして少年だけをどこかに連れて行こうとする。

だが数人の男に引っ張られ、女性一人の力ではどうすることもできない。

残されたのはベッドの上の女性と、変な笑みをこぼしながら自身の服を脱ぎながら近づくデュリビット。

「…素直にわしの女になれば重労働は特別に免除してやろうぞ」

ぐふふふ、と抑えきれない笑みが女性に近付き、逃げられない相手に恐怖を感じたその女性は何も叫べなかった。

言葉が喉を通らない。

そして「助けなど来ない」という考えが彼女の脳裏をよぎった時、恐怖は最大となった。

だがデュリビットのしわだらけの手が彼女の胸元に伸びようとしたその時だった。

ドドォーンッ！！

「な、何事かつ！」

巨大な爆発音が鳴り響き、辺りが微かに揺れる。

普通の炭鉱では爆弾を使って掘り進むこともあるのだが、この廃坑となった炭鉱では爆弾など一切使わないし、ましてや爆発する要素のある物質も物体もここには存在しないはず…

では何がこれほどまで近くで爆発したというのか。

「ぬ…お前達、様子を見て来んか！！」

「ははっ」

どこからか現われた男らは皆片手に剣を持って続々と音のした坑道に突き進んでいく。

おかしい、この先には我が最強のラ・ホークらがいるというのに…

デュリビットはこうしてはいられない、と服をまた着直すと側近の護衛に護られながら恐る恐る坑道の方に歩み寄った。

だが次の瞬間、

ズドォーンッ！！！！

新たな爆発に続くもう一発の爆発。

先ほどから何やら騒々しい様子もあったが、作業の者らの音だろうと勘違いしていた。

どうやらコイツは違うらしい。

何故なら、デュリビットの目の前で先ほど入って行った兵士らが焰に焼かれながら吹っ飛んできたのだから。

ドサツという音と共に兵士らは「うう、」と火傷の痛みに唸るばかりである。

「な、な……」

もうこれは明らかに人為的要因である。

残されたデュリビットは思わぬ展開に腰を抜かしてしまっていた。

誰？　そして何が起こった？　何故これほどまで突然に！？

そんな不安をさらに加速させる青年の大声が閉め切られた広い空間内に木霊する。

「これで1548羽目ええええ！！！！」

決め手のドンッという爆発が坑道入り口で起こり、中からは巻き起こる硝煙と共に一人の青年が顔を少し煙で黒く染めながら飛び出してきた。

彼の片手には焰をたぎらせる剣に加え、二羽のラ・ホークが握られていた。

相当重いはずなのに彼は空いたもう片方の手で5羽くらいのラ・ホークの首を掴んでいる。

いずれも真っ黒焦げで、原型をとどめているからいい物の、まるで焼鳥屋が間違えて焦がしてしまった鶏肉のようである。

「俺で1549羽目ええ……って、あれ？」

焰と共にでっかいラ・ホークを牙に刺しながら飛び出してきた一頭の狼がラ・ホークを吐き捨てて大声を張り上げたのだが、二人とも哑然とするばかりであった。

「…誰？」

いやいや、それはこっちが訊きたいっつの！！

思わず青年に向かってストップをかけたくなるデュリビットであっ

だが、二人があのだ・ホークの群れを片付けてしまったのか、と思うと背筋に悪寒が走った。

「し、し、侵入者だ!!」

デュリビットが大声で吐き捨てると同時に彼の後ろにいた護衛数名が一気にラクラスとバルドに槍や剣を持ってかかる。

彼らはちよいとそこらの護衛では無く、力、剣術などに大変優れた者共。

彼らがそう簡単にやられるわけ…

放置された少年とベッド上の女性がその様子を見守る中で、まさかの事態が起こった。

「…つとに邪魔くせえ!!」

ビュンっという剣を振り下ろす音と共に焰の咆哮が男共を呑みこむ。

勿論、いかなる特技を持っていようと、広範囲に渡る攻撃をか

わせるはずもない。

皆デュリビットの期待とは裏腹に焰に弾かれて空に舞うだけであった。

……嘘……？

啞然としてへなへなと地に座り込む老人、デュリビットを前にラulasは焰を盛んにたぎらせた剣を見せつけた。

業火の如く燃え盛る剣は熱線を帯びていた。

「誰かは知らねえが、ちよいと話を聞かせてもらわなきゃならねえみたいだな」

「へ、へい…」

もう味方を失った老人にどうすることもできない。

デュリビットはついに何もすることができずに跪いた。

その様子を常に見つめていた高貴なドレスに身を包んだ女性は、
眼を極限まで輝かせながら両手を自身の胸の前で組みながら涙を流
していた。

そして抑えきれない感動を胸に、理性よりも行動の方が優先され
た彼女は何の躊躇いもなくベッドを飛び降り、早足で駆け寄って両
腕を一杯に広げながらラクラスの元に抱き付きに行った。

「王子様あ……!」

はいっ……!?

暴かれた正体（後書き）

色々話を飛ばしてごめんなさいです。

まずデュリビットという老人自体出てきたばかりなのに、何故女性と少年が囚われているかを説明し遅れた…というか都合上できま
せんでした。

きつと本編でさりげに理由入れますので。

あと、長くて申し訳ありませんが『採掘禁止になったはずの炭鉱編』
の内容を知りたい御方はどうぞご連絡ください。

番外編として載せさせていただきます。

そのネーミングセンス（前書き）

馬に名前を付けるとしたら、何にする？

そのネーミングセンス

それから間もなくして軍がスビッツ村に到着し、一旦廃坑となった炭鉱で密かに採掘を続けていた関係者、及び最高責任者であるデユリビットは逮捕され、無理矢理監禁され連れ去られた労働者らは皆帰るべき場所に帰った。

そしてあのドレス姿の女は国の相当有名貴族で、王家筆頭貴族の人らしく、御嬢様ということだけあって立派な幌馬車で帰って行った。

スビッツ村に現われ、あるいは他の街や村で危害を及ぼしたラ・ホークも掃討された。

おかげで今では夜でも外に出歩くことができるようになったらしく、数日経った今では、村にも笑顔が戻った。

ラ・ホーク来襲を知らせる鐘に24時間いた見張りの者は今ではいなくなった。

そう、もうラ・ホークが現われなくなったからだ。

村と別れを告げる事件解決から5日目の朝、ラクラスはランベル氏の家の玄関に立っていた。

「もう少しゆっくりして行けばいいのに」

「いえ、僕たちは旅から旅への根無し草。常に新たな任務^{ミッション}を求めて旅を続けたいんです」

温かな日差しに身を包まれながらラクラスは玄関に立つランベルと、炭鉱で助けた彼の息子リックを前に最後に頭を下げた。

そこに娘リーンの姿は無かったが、彼女は麓でラ・ホークを売った金で立派な病院で入院できている。

「娘の命が助かったのも全て君のおかげだよ」

「全然気にしないでください。こっちはこっちで儲けさせてもらいましたから」

ラクラスは腰に付けた、硬貨や紙幣で満タンになったいくつもの袋を見せつけた。

牧場の荷車に1000羽以上のラ・ホークを積載して全て売却し、ランベル氏と山分けした後でもこの大金なのだ。

しばらくハンターの仕事をストックというかさぼっても豪遊して暮らせるだけの資金が集まった。

「…父さん」

「ああ。分かっている」

ラクラスが低頭し、バルドを連れてスピッツ村を去ろうと踵を返した時だった。

「ラクラス君！」

急にランベルが調子の良い声を張り上げたものだからラクラスは思わず眼を丸くして飛び上がってしまった。

「ラクラスさん、見て頂きたい物があるんです」

リックと云う少年を救助してからラクラスとはあまり話す機会が無かったのだが、彼は何の躊躇いも無しに微笑みながらラクラスの方を向いた。

「見て欲しい物？」

するとリックは足を弾ませながら心身を高揚させて真横の倉庫のよ

うな建物に駆けて行った。

一分もしない間に彼は戻ってきたが、連れていたのは家畜ではなく、立派な茶色の毛並みを持った一頭の馬だった。

細長い顔に長い脚、凜としてピンと立った耳。

「どうかこの馬を旅のお供にしてやってください」

「いや、別にそんな礼とか求めて無いですからお構いなく…」

だがリックとランベルは引き下がろうとはせず、手綱を引くとラクラスの真横に持ってきた。

若い馬のようでまだ大きさは大人の馬ほどではないが、大地を疾走できるだけの筋肉は兼ね揃えているようだ。

「この馬は数か月前にこの森に迷い込んだ迷子で、ラ・ホークの襲撃の被害に遭っていたので助けてここで飼っていたのですが、あなたは世界を旅するとおっしゃった。

：この子にあなたの手でどうか世界と云う物を見せてあげて欲しいのです」

「世界、ねえ」

ラクラスは腕を組みながら考えた。

馬での移動なんて考えたことも無かったし、乗ったことはあっても旅をする為に乗ったことなど一度も無い。

しかし馬の脚があれば目的地にも徒歩より早く到着できる。

しかもくれる、と言っているんだ。無いよりあった方が得に決まっている。

「…分かった。旅の友として俺が連れて行こう」

「ありがとう」

ラクラスとランベル、そして短期間ではあるが馬を世話してくれていたリックとも握手し、彼はついにスピッツ村の牧場を去った。

勿論馬に跨ってなのだが、馬は静かに彼を乗せて下り道の山道を下り続けていた。

山を越えれば麓に出て、徐々に周りにある物は木々では無く人里の民家になってくる。

すぐ近くには首都でもあり王都でもあるイリアーナの王城が奥に姿を出し、城下町として栄える民家が立ち並ぶようになり、商店街などが現われて徐々に人気が増してくる中でラクラスは突然こんなことを言いだした。

「馬の名前が無いのは何とも不憫だからな、せめて命名してやろうじゃないか」

狼のバルドはこの世界では喋ることのできる種類。

しかし馬の場合は言葉を口にすることはできない。

ラクラスの言葉を聞き、馬の足元で早足で沿って歩いていたバルドは凜然たる顔を上げた。

「じゃあこういうのはどうだ？ 俺とラクラスを混ぜて『ラクバ』なんて」

「…いや、『落馬』で何とも縁起でも無い名前になりそうだからやめておく」

ラクラスはバルドのあまりにも下手なネーミングセンスに少し失望の感を覚えた。

「では逆にしてバルラスっていうのは？」

「ちょっと馬にしては厳つ過ぎる名前だからやめとく。……何かもつとしつくりと来る名前は無いのか？」

騎乗で偉そうに腕組をしながら下のバルドを眺めると、バルドは気に食わなさそうにブスツとした表情で眼を細めた。

「あくまで狼^{オレ}のネーミングだ。人間の好みなんてのは流石に理解できねえ」

言い返したくても言い返せなかった。

確かにそう言われればそうだ。彼はあくまで人語を使うことのできる狼。

ネーミングセンスなどは異なるはずだ。（てかネーミングセンスとかあるの？）

「ラクラスの馬だ。名前なんて好きに決めたらいい」

最終的な結論だった。

ラクラスも「うーん」と悩みながら顎を片手で擦る。

その時、彼を乗せた馬が通り過ぎた商店街のとある店先の樽に山積みされていた林檎が目にとまった。

真っ赤に熟れているようで、今が食べ時のようである。

ここらは年から年中温かいのだが、北にもっと進めば超を超す様な極寒の地があり、山は全て雪で覆われ、水は凍り、寒さに強い針葉樹でも中々生えないという地がある。

きつとそこで収穫した林檎を並べているのだろう。

「じゃあコイツの名前はアップルだ」

「はあ!？」

バルドは眉間にしわを寄せながら「何だって？」と訊き返した。

「いやあ、ホラ、何か可愛くて愛嬌があるっぽいじゃん」

照れくさそうに頭を掻くラクラスを背に乗せている、彼に命名されたアップルは元気そうに鼻をブルツと震わせた。

「なあラクラス、この馬は雄、オトコなんだよ？」

「分かってる。たまにはそういう変わった名前の方が希少価値があるだろうがっ」

「いや、変な名前付けられて希少価値って言われるくらいなら、いっそのことありふれた名前がいいと思うのだが…」

しかしラクラスは馬の額を撫でたままバルドの言う事を全く聞かない。
い。

まあ自分じゃないからいいけど：

ラクラスと最初に出会う前に自分に名前があったからいいものの、もし自身の名を付けてもらうならば、命名者はラクラスだけは絶対にやめておこうと心に強く誓ったバルドであった。

旧友の行進

街をアップルに乗って歩いていた時だ。

何やら大通りの方がかなり騒がしい。

商店街を抜けて街のメインストリートに出た時、民衆がざわめいていた理由がやっと分かった。

国王の通行なのだ。

国民が土下座までして馬車が通り過ぎるのを待つ、ということはないが、国王の乗った馬車が近付いてくると民衆の私語は慎まれた。

荘厳な空気が席卷する。

たった一台の幌馬車に数十、いや、数百を超す護衛の軍隊を常に隊伍を乱さずに付いており、皆が無言のまま姿勢を正して正面を向いている。

国王を迎える民の格好^{ポーズ}として片膝を着き、通行する者より頭を低く下げないといけないのがこの国の決まりなのだが、ラクラスはついぼうっとしてしまつて騎乗のままその様子を眺めていた。

そして気付いた。

皆が低頭しているのに、自分だけが目立って馬の上で偉そうにしている、と。

勿論これはただじゃ済まされないのは分かっていたが、気付いて慌てた時には遅かった。

「…ぬ、その者！ 国王陛下が御通りになるというのに頭を下げんかつ！…！」

ラクラスだけが民衆の中、騎乗でぼうっとしていることに気付いた衛兵の男は大声を上げて指摘した。

それに対して別にからかう気は無かったが、ラクラスは馬から下りずにそのまま騎乗で頭を下げてただけだった。

普通は馬から下りて礼儀を正すのが普通なのだが、これには通行していた国王の側近部隊も顔を真っ赤にして憤怒する。

「貴様！！ 今自分が何をしているのか分かっているのか！！」

ヤバイ…

てか第一、国王が通るだけで大げさだし。

すっかり行進を止めた部隊は手にしていた槍を持ってこちらにやってきた。

馬を引き返してトズラしようにもいつの間にか後ろにも並んでいる者がいて、このまま無理矢理Uターンしたら後ろの人間がアップルに踏みつぶされてしまう。

逃げ道は無いし、正面からは顔を真っ赤にした兵がやって来る。

どうしよう…

ラクラスにも焦燥の感が見え始め、バルドも腰を低くして牙を見せながら唸った時だった。

「待て!!」

幌に乗っていた男性が声を張り上げた。

兵士らも、国王の声に反応して一旦動きを止める。

「何も頭を下げなかっただけで怒る必要は無いだろう。　そうだろう、ラクラス？」

確認できた。

旧友でもあるランゼルスだ。

彼は幼いころから体が弱く、細身で何となく頼り無い雰囲気は外見からもし出していたが、今は陰で院政を行っている先王の息子というだけで王子から国王に何となく上り詰めただけの人間である。

細身の外見はあまり変わっていないが、何となく大人の品格と云うか、少年では無いもつと年上の雰囲気が入っている。

「…久しぶりだな、ランゼルス国王陛下」

ラクラスは嫌みったらしく、そして『国王陛下』の部分だけを変にアクセントを変えて発音した。

幌から姿を現したのは言うまでも無いが、瘦身の上に紺の軍服を身に纏った若者、ランゼルスだった。

「私の友人だ、お前達は下がれ」

その一言だけだったのに、先ほどまで憤慨していた男共は「それは失礼いたしました」などとかしこまって頭を下げたくらいだった。

「……ま、こんなところで話をするのはどうかと思う。お前には色々と礼を言わねばならんでな、後で王城に来るがいい」

ランゼルスは破顔し、はははは、と軽やかに笑った後再び幌に戻った。

そしてラクラスが王城に着いたのは、それから数時間後の事である。

アイルーン

城内には王の持つ部屋と云うのがあり、黒色のソファやビリヤード台、酒場やバーを真似た造りで酒瓶がズラツと置かれている空間などがあった。

他にも100を超える部屋を持っているというのだが、やはり彼の好みの部屋はどれも質素な造りだった。

「…で、ラクラスはまだハンターを続けているのかい？」

ランゼルスはテーブルを挟んでラクラスの正面のソファにどっかりと腰掛けると、ふう、と大きなため息をついた。

二人の目の前には使用人から酒の入ったボトルとグラスが置かれ、それぞれに酒が注がれた。

「んー、続けているって言えば続けているが、最近人間を狩った様な気がする」

「物騒だな。…もしかしてスピッツ村の事件の事を言っているつもりなのか？」

ランゼルスは破顔しながら酒の入ったグラスに口を付けた。

「何かスビツツ村の廃坑になったはずの炭鉱で活動を密かに続けたジーンサンは捕まえたぞ？」

「それだ」

ランゼルスはグラスの酒を飲み干すと、コトンツと小さな音を立てて白のテーブルクロスが敷かれたテーブルの上に置いた。

「その事件で、の事なのだが、アイルーンというハイリア王国筆頭の大貴族の令嬢を知らないか？」

ラクラスは天井を見上げながら目線を逸らして考えていたが、やがて彼女の事を思い出すと酒の入ったボトルごと口に付けた。

「…アイルーンとか何とかは知らないが、確かに炭坑内で女を一人助けた」

「やっぱりか。…そのアイルーンという令嬢なのだが、お前に会いたがっている」

ラクラスは酒をラッパ飲みしながら「そうか？」と云う眼で彼女を見た。

「……彼女、ラクラスと是非とも結婚したいと言って…」

「うぶっ」

酒を嘔きかけた。

鼻の穴から呑んだ酒が逆流して出てきそうで鼻の奥がかなり痛かった。

「はあ！？ 俺は別に…」

「んゝ、ラクラス、昔頃からウブなところは変わって無いな」

「…お前、ただその言葉を使いたかっただけだろ」

するとランゼルスは虚を突かれたかのようにピクツと反応し、言葉を失いながら誤魔化しの笑みを浮かべていた。

「と、とにかくだ。 俺の話聞いてくれ！」

彼は周りに聞こえるように声を大きくした。

しかしやがてラクラスが酒瓶を一人占めしたせいで、新たな酒を奥から持って来ようと使用人が二人から離れた時だった。

「…、どんなテを使った？」

「は？」

彼は真摯な眼差しでこちらを見ると、声をかなり潜めながら身を乗り出した。

「ホラ、あの令嬢クイーンをオトス為の手段だ！」

何コイツ？

もしかしてあのアイルーンとか云う奴を狙っていたのか？

「いや、ただ救出に行って出会っただけだが、どうかしたのか？」

「よくぞ聞いてくれました！」

…実は俺にも気になる女性がいてな、…ホラ、国王の権力を濫用して『明日からお前は俺の妃だ、』とか言いたくないからさ、どうや

「ったらお前みたいにたった一日で女性の心を奪^{ハート}えるのかなって」

ラクラスは不穏な眼でははくんと云うような顔をした。

「心配するな、男は外見だけじゃないさ！」

いや、じゃあ俺は外見駄目なんだ：

アドバイスにならないアドバイスの様な気もしない事も無いが、何となくランゼルスは落ち込んでいた。

「女なんて星の数ほどいるしなっ。自分の行^なう『国民還元政策』みたいなやつたらファンができるんじゃないのか？」

その手があったか！ というような顔をしてランゼルスは前を向いた。

「税率を下げたり、税の額を下げたりするのか？」

「俺は政治家じゃねえからよく分からねえ。ま、お前は自分の意志で国を180度変えられる立場にいるんだ。

それくらいは自分でやらなきゃ、女は付いて来てくれないぜ？」

ランゼルスは思い切った表情でバツと勢いよく立ちあがった。

その後ろにいた使用人も一瞬酒瓶を落としそうになってあたふたとする。

「…俺の事はいいのだが、ラクラス、アイルーンが是非とも会いた

いと言っているのだが、会う気はあるか？」

ランゼルスが妙に声に張りを出してボリュームを大きくしたことから、きつと外で彼女が盗み聞きでもしているんだろうな、とは悟ることができた。

「勿論、会う気は（今のところ）満々だぜ！」

半分詭弁と云うか、嘯いた部分があった。

別に女性は嫌いじゃない。だが、旅をしている俺からすると辛い旅に付き合わせたくは無かった。

「いいよ、入れアイルーン」

ランゼルスはドアの外に向かって叫んだ。

やっぱりか…

「…ラクラス様……」

別に様は要らないのだが…

周りの兵にドアを開けられ、スツと音も無く馬鹿ほど長いドレス姿で入って来たのは、間違いなくスビッツ村の女性だった。

髪を後ろの方で括って立て、長い髪を胸元の辺りまで流している。

「改めて紹介しよう。我が王家筆頭貴族にあるネクシス家令嬢アイルーンだ」

アイルーンはランゼルスからの紹介を受けると、貌を赤らめながら一礼した。

…というか見た目からリッチな雰囲気がある。

フリル付きドレスに、窓の外から差し込む陽の光に反射して輝くスパンコール。

そもそも何やら家の令嬢だけあって、金は一生困らないに違いない。

「スビッツ村では御世話になりました。

私、あのままではデュリビットとかいう小汚い下衆&野蛮なクソジジイにいじめられるところでしたわ」

言い方は可愛く言うように気を付けているらしいが、内容は中々リアルである。

というか、貴族なのに上品も下品も無い。

「どうだろうか？ 彼女はお前に一目惚れし、どうしてもお前と一緒にいたいらしい」

「…悪いが、俺みたいな職種ハンターだと流石に貴族階級の人の親が何と云うか…」

何となく恥ずかしくてアイルーンとは言えず、貴族階級という言葉を使わなかったのだからそれでも彼女は真っすぐにこちらを見つめていた。

「いいえ、私の両親からは許可を頂いておりますし、ラクラス様本人が私と…というのなら」

要はいつでも結婚できる、って言いたいのだろう。

確かに話としては悪く無い。

彼女は胸元も豊かで何より群を抜いて美しいし、大貴族で金持ち、優しそうで何となく子供想いって言う感じ。

だが心の迷いがあった。

世界中を捜してもこれだけ完璧な人はいないだろうが、何故だろうか。何故か拒んでしまう。

「考えてもいいか？」

「勿論です！」

曖昧な返事であったが、彼女は嬉しそうな貌をした。

「…そういやラクラス、お前は来週に行われる『戦会』に出るのか？」

「何それ？」

「武器は何でも良く、剣や矢を巧みに使って指定スペース内で時間以内に現われた獣を倒す、という闘技でございますわ」

ラクラスはアイルーンの微笑ましい表情と、言っている内容を比較させて啞然とした。

「そ、それってもしかしてリブラとか？」

「そうだ。トーナメント戦になっているのだが、どうかお前も出てくれないか？」

「いや、来週ってことはすでに×切とかが…」

正直逃げたかった。

リブラと云う猛獣を倒すのに、昔かなり手間取って殺されかけたことがあるから奴だけはトラウマなのだ。

「×切？ そうだな、確かにもうとっくに終わっているが、私の顎を使えばどうにかなる話ではないか！」

白々しくランゼルスは拳を手の平に打って何かを突然思いついたかのような表情をした。

「…で、出場しろって？」

「ラクラス様が出場なさるのなら私も！」

は？

いやいや、アンタみたいな女性が出て猛獣に負けたら大変だから！！

「…もし猛獣とかに負けたらどうなる？」

「いい事を訊いたな。この戦いはあくまで闘技。猛獣に勝てばその都度賞金がもらえるが、負けると大変なことになる」

彼が言葉を濁したことから、擦り傷程度では済みそうに無い、ということはうかがい知れた。

ならば余計にアイルーンは出場しない方がいい。

「あ、アイルーンも参加するのか？」

やっと口にできた名前だったが、彼女は今までになく温かい笑みをその美貌に浮かべた。

「勿論です！ 観客席側として！」

あ、そう…

何だか一瞬で冷めた気がした。

ちょっとばかり驚嘆した俺が間違いだった。

アイルーンはうきうきしていたが、ラクラスは正反対にフラフラしながら落ち込むことしかできなかった。

先に行きたいところがあるのに…

それから数時間後、ランゼルスから直々に『ラクラスの出場を申し込んだ!』と言われた。

全く、さっきは『権力を濫用して何やら』などとはざいていたのに、今の行為は完璧に矛盾している。

なのに今でも酒を呑みながらのほほんとソファーに座っている。

十数年前から変わっていないな…

ラクラスは長い回廊で軽いため息をつくと、先ほどの暗い表情を吹き飛ばして前向きになって顔を上げた。

まあ、賞金がもらえろと思えば、悪く無い闘技だ。ゲーム

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7133p/>

MOMENTS

2010年12月31日03時02分発行